

10円商店街 店主は小学生

自ら商品やサービス準備し店舗運営

小学生が店長となり、自ら商品やサービスを準備して店舗を運営する体験型イベント「こども10円商店街」が、22日に静岡市葵区沓谷の愛宕貯留地グラウンドで開かれる。NPO法人「まちなびや」(静岡市葵区長沼)の主催。理事長の弓削幸恵さん(45)は「お金は何のためにあるのか、何に役立つのかを子どもたちに伝えたい」と話している。



昨年3月に開かれ盛況だった「こども10円商店街」は静岡市葵区沓谷、NPO法人「まちなびや」提供

商売通しお金の役割学ぶ 22日静岡・葵区

「10円商店街」は今年で2回目。昨年は小学1年生から6年生までの27組約70人が、雑貨やくじ引き、大道芸、ゲーム、紙芝居の朗読、ハンドマッサージなどを10円均一で提供した。1千人近くが来場し、4万円近くを売り上げたという。

今年20組約50人がエントリー。商品やサービス内容、お店のデザインなどは子どもたちが自身で考える。3月1日と8日に開かれた「店長会議」には子どもたちが出席。講師のしずおか信用金庫の職員から、お金と商売の仕組みや接客を学んだ。

22日の本番は午後1時半から午後3時半まで。雨天の場合は翌23日に順延となる。入場無料で、買い物は誰でも可能。信金職員が両替や売上金の集計などを手伝う。「お店に立つ間に子どもたちの表情が変わる。成功や失敗から学んで成長する姿を見てほしい」(弓削さん)。

売上金は地域のボランティア団体に寄付する。4月5日にはイベントを振り返りながら、寄付する団体と金額を子どもたちの投票で決めるという。

問い合わせは、NPO「まちなびや」(054・264・7170)へ。

「学校でも家庭でもない学びの場を」

「まちなびや」の弓削幸恵さん(右)と板倉りえこさん(左)は静岡市葵区長沼



主催するNPO「まちなびや」

「親以外の大人と出会う機会が少ない子どもにも、プロの言葉の重みは伝わる」とメンバーの板倉りえこさんは話す。

地域の子どもと大人をつなぐ「まちなびや」の活動は、来年で発足10年。弓削さんは「子どものために動く地域も元気になる。そんな循環を生み出したい」と意気込む。(大内悟史)

NPO「まちなびや」は2006年3月、静岡市教育センター研究員を退職した弓削さんらが始めた。「身近な千代田小学校の学区で、放課後の子どもたちに学校でも家庭でもない居場所と、幅広い学びの場を提供したかった」という。

事務所の一角には、地域の子どもの興味を引こうと駄菓子屋を並べている。弓削さんは「駄菓子屋は子どもが放課後にちょっと立ち寄る場。計算や生活感覚、大人と意思疎通する力も鍛えられる」と言う。

「こども10円商店街」はお金について学ぶ機会を提供しているが、子どもと地域で働く大人との出会いをお膳立てする取り組みも始めている。

2011年から毎年、清水駅前銀座商店街(同市清水区)などで、子どもの職業体験や社会体験を目的にした「模擬商店街」の企画運営に関わる。林業や消防士などいろんな仕事を紹介する子ども向け情報紙「コドモンデ」も約2万部発行し、静岡市内の全小中学校に配っている。